

圧倒的に粒あんが好き柏餅

加藤潤子

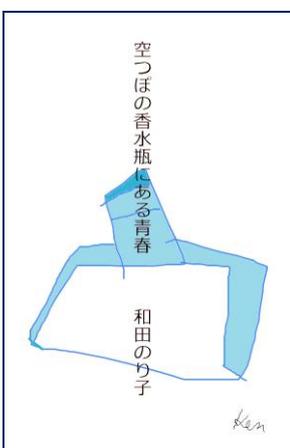
「圧倒的に」がいいね。「絶対に」とか「特別に」などとすれば普通である。言葉を自分流に使いこなせると、個性的な句が作れる。



アマリリス江戸の太夫でありんすか

敷島鐵嶺

「太夫」とは、江戸時代の最高位の遊女や芸妓のこと。容姿端麗のみならず、幅広い教養を持っていた。花の華やかさが直観的に作らせた句。



空つぼの香水瓶にある青春

和田のり子

香水瓶は空き瓶となっても香るものである。それはいつまでも脳裏に残る青春の思い出にも似ている。かすかだが、決して消えることはないのだ。



大夕立
花壇の花に深情け
吉川正紀子

大夕立花壇の花に深情け

吉川正紀子

一雨欲しい花壇の花たちに、水分補給してやろうという夕立。手加減を知らぬから、ついついサービス過剰となる。情け容赦もない降り方となる。



宅地化を厭ふひまはり
手をつなぎ 横山洋子

宅地化を厭ふひまはり手をつなぎ

横山洋子

ご近所の人達を楽しませてくれていた向日葵も、今年が見納め。どうも宅地になるらしいよ。立ち話を耳にした向日葵たちが団結して抗議。



打ち水の
庭に日陰の色拡げ
柳 紅生

打ち水の庭に日陰の色拡げ

柳 紅生

打ち水をすると地表の温度が下がるが、見た目涼しさを演出するものでもある。水のかすかな影の色を「日陰の色」と名付けて詩になった。